



南大沢学園養護学校の保護者の皆さま 教職員の皆さま お子さまのご卒業おめでとうございます。



本来ならばお子さまたちの成長を皆さんでよろこびお祝いするのが卒業式です。その卒業式あるいは入学式に、2003年、東京都教育委員会は教職員に向けて、一つの通達を出しました。「教職員は、国旗に向かって起立し、国歌を斉唱する」ことなど、卒・入学式の国旗掲揚や国歌斉唱方法などを細かく定め、その実施を命じる校長の職務命令に従わない場合、服務上の責任に問われることを明記したものです。

こうした傾向は幾つかの都道府県で始まっていますが、東京のそれは突出しており、不起立の回数を重ねるごとに処分を重くするというものです。

それによって、これまでに388名の教職員が処分を受けています。中でも、この学校で働く根津公子さんは、「教育に反することに加担することはできない。理不尽な職務命令には従えない」として、校長の出す、起立を求める職務命令にずっと従わずにきました。それまでの処分が重なって、昨年、町田市立鶴川二中の卒業式での不起立では停職6ヶ月の処分を受け、今日の卒業式で不起立をすれば、免職にされる状態にあります。彼女はそれでも、「どんなに脅されても、子どもに責任を持つ教員として起立はしない」と言います。

「今のように、子どもたちに『君が代』の意味さえ教えず、考えさせずに、『立ちなさい。歌いなさい』と指示に従わせるのは、調教であり、学校でやってはいけないこと。教育であるならば、子どもたちが考え判断するに十分な資料提供を教育活動として行わなければならない」「『みんながやるから』ではなく、それがいいことかどうかを考えて行動しよう。おかしい、と思ったときには一人でもやらない勇気を持とう」と私は常日頃、生徒たちに言ってきた。その私が、都教委の圧力に屈することはできない」と、根津さんは言います。

今日ここに来た私たちは、君が代そのものについては、賛成から反対、わからないまでさまざまな立場、思いがありながらも、こうした根津さんの教育や子どもに対する姿勢に共感する者たちです。古くからの根津さんの友人や教員仲間もいますし、根津さんが転勤させられた学区で知り合った保護者や住民、報道等で根津さんのことを知って駆けつけた者もいます。

根津さんを「君が代」不起立で解雇させてはならない！ 圧力に負けずにものを言える教員にこそ、学校に留まってほしい。そうしないと、ものの言えない、不条理がまかり通る学校になってしまう。我が子や我が孫の通う東京の学校が、都知事や教育長の私欲に任せて動かされるのはやめさせたい。子どもたちには、真実を見つめ、自分の頭で考えることのできる、そして、差別や不条理を許さない人になってほしい、と願っています。

皆さんの中には、教育委員会が決めたことだから従うのは当たり前、と思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、しかし、国や地方自治体（東京都）が過ちを犯すことは、歴史的に見ても、よくあることです。論議が保障されず、上意下達の徹底した組織では、往々にあることです。侵略戦争ばかり、新銀行東京の運営ばかりです。「日の丸・君が代」の強制と教員処分も、間違っています。現に、東京の教職員の多くは、この強制と処分に反対していますが、反対の意思を表明すれば、嫌がらせが待ち受けているので、口をつぐまざるを得なくなります。

このような思いから私たちは、皆さまに、根津さんのことを理解していただきたく、ここに立っています。どうぞ、私たちの意をお汲み取りくださいますよう、そして、根津さんを支えてくださいますよう、切にお願い申し上げます。

2008年3月24日

今、南大沢学園前の道にいる者一同より



「卒業式」に向けて 世論は暖まっています。



不起立教師を また処分なの

主婦 吉田 和古

(東京都世田谷区 45歳)
2月末に都内で開かれた、根津公子さんの模擬授業を体験する催しに参加した。根津さんは東京都内の

公立中学の家庭科教師で、君が代・日の丸の不起立問題で何度も厳しい処分を受けてきた人だ。

「自己主張の強い過激な人なのでは」と思いつつ会場に向かった。しかし、それは完全な偏見だった。根津さんは30年を越すキャリアの中で、一貫して

「考える授業」を模索し実践してきた。君が代・日の丸問題でも、上から命令が下りたからと言って起立できないと判断したという。この日の合成洗剤について考える模擬授業や翻訳家の池田香代子さんとの対談では、終始穏やかに語っておられた。その顔は

「子どもたちをより良く育てたい」と、それだけを望んでいる誠実な一教師だった。

根津さんの勤務校の卒業式が3月24日に迫っており、今度も「起立しません」と根津さんは決意している。再び不起立を通せば都教委が「クビ」を言い渡すのではないかと心配だ。

私たちは、子どもに対して誠実であろうとする教師が、学校から排除される事態を傍観するしかないのだろうか。

喜び共有する 卒業式であれ

08-3-11

主婦 金子 洋子

(宮城県大和町 73歳)

「君が代起立へ 圧力許せない」(4日)を読み、胸が痛んだ。喜びに満ちた卒業式を重苦しい気持ちで迎えないければならないとは何と残念なことだろう。

7年前のことだ。東京の公立中学校に通っていた孫の卒業式に出た。ステージの正面の壁を飾っていたのは国旗でも校旗でもなかった。「Congratulation」の文字を美しい花々で囲んだ手作りの壁画だった。在校生たちが作ったのだろう。

国旗と校旗は、旗さおにかけてごく自然な形で立てられていた。「君が代」のテープが流れたが、起立の強制もなかった。

何よりも心が温まったのは最後に行われた全校生徒による「花」の合唱だった。送る者と送られる者の熱い思いがわき上がり、歌う者も聞く者も等しく大きな感動に包まれた。

つくづく思うが、卒業式は誰のものか。それは生徒たちのものではないか。送る者と送られるものが等しく母校を愛し、誇りと感謝をもって巣立っていくものではないか。

都知事の圧力や校長の押しつけで縮こまってしまいうような式ではなく、教師と生徒が一体となって喜びを共有できるような卒業式を願ってやまない。



投稿先は ◆〒104・8661 東京・京橋支店私書箱300号、朝日新聞「声」

◆FAXは0570・013579◆メールはtokyo-koe@asahi.com◆電話番号を明記